

市の図書館ホールに特設コーナーが作ってあった、ふらりと覗いたのでそのタイトルを見損なったが、先の大戦、第二次世界大戦での日本内地での人々の暮らしことだった。戦後 1 年半で生まれたオレは親やその周りから戦争当時の様子をよく聞かされた。大きな飛行機ばらばら落ちてくる爆弾、大火事になって燃える市街地、小さい飛行機がヒトめがけ撃つ機関銃の恐ろしさ、怖い憎いというような感情が個々のヒトの身体の中で固定化され「またあの おっさん あの話し」と何度も聞いた。ある程度大きくなって映像画像でも見た、フィクション・ノンフィクションの文章・映画・芝居でも見た、抑制された作品になってくるとおそらくその当時みんなが感じた感情よりも心が振るえ、魂の昇華というようなことがテーマになってオレにとっては非常に面白いけれど大衆からは「こんなもんじゃなかった」と嫌われたかもしれない。先日も「人権の講演として 戦争体験を語ってもらおうか」という話があったが、今これを語れる周りのヒトは 80 歳以上の人たち、当時の見聞きを思いつくまに語られても我々の親や周りのおっさんおばさん連のおしゃべりに始終しそうで「それはどうも・・・」と反対した。展示には防空壕の模型、小さいものと実物大の空間、朝鮮中国辺りから親と別れ迷子になった当時の少年少女が事なきを得て何とかかろうじて内地に渡り今を生きているというような体験談もあった。実物大の模型には骨董屋からでも借りてきたのか当時の粗末な机、そういえば当時はこんな色形の湯飲み茶碗だったと思わせる茶碗が 5.6 個机に置かれていた。防空頭巾をどうぞ被ってみてくださいと置かれていた、買ったばかりの新品の布で作られている、これはヘルメット代わり、爆発による破片を防ぎ火の粉を防ぐ、今のように全員に配るヘルメットは無かった時代だ。防空壕はさすがに知らない見たことが無い、今のようなシェルターというような立派なものではなく 1.2 メートル土を掘り、屋根を架けただけかな、爆弾の直撃なら吹っ飛んでしまうようなちやちなものだったのではないだろうか、というようなものがいくつか飾られ、女性が二人座っていた。8 月 15 日が終戦記念日、この日が近づくとこのような催し、広島長崎の核爆弾被災の催しが年中行事だ。祭りのように毎年記念式典と集会がある、今となっては祭りという表現でいいのでは。

遠野物語にでも出てきそうな祭り、現代に生きる男も女も藁で形づくった船も、提灯、果物、直垂、極色彩に飾り立てそれを川に流す「先祖のために」「自分のために 次の世代のヒトが 同じようにやってくれるように」火をつけて川に流す、暗い田んぼの山里に燃え上がった藁船が火の粉をあげて遠ざかる。「カタカタと音がする」「いよいよ帰ってこられたか」「よう帰ってきてくれた」亡くなったヒトを親しく迎える、「さあいっしょに食うべえ」「楽しく飲むべえ」おだやかな楽しい時間が流れる。吉谷君もあらわれてくれるなら、1.2 時間飲みたいねえ「ただお前は飲むとしつこいから 1.2 時間でかえれよ」なんて楽しそう。

精神分裂の話を読んで気になっていた、その系統の本を読みたくて書架を探した、精神分裂病そのものの本は無かったが、近藤裕<脳病院をめぐる人々>を見つけプロローグをパラパラ、懐かしい名前が出てくる。それこそ吉谷君も二十歳代には“狂気”“アウトサイダー”“ダダ”などの言葉を連発して泥酔していた。

1927 年（昭和 2 年）青山脳病院の門前に 2 台のハイヤーが到着した。降り立ったのは芥川龍之介と広津和郎である。やや慌ただし気に見える彼らの目的は、二人の共通の知人宇野浩二の発狂について、青山脳病院院長にして歌人の斉藤茂吉に診断を乞うためであった。生まれて間もなく母の発狂のゆえに芥川家の養子になり生母の狂気が自分に遺伝していると恐れていた龍之介は、自らも神経衰弱の診断を茂吉に乞うており、その病状が「歯車」等に語られているように重篤であった。3 人で宇野邸に向かうと宇野は数日來の錯乱状態とは打って変わって茂吉の前では平静を装う。因みに宇野の狂気は脳梅毒による進行麻痺という、当時の精神医学で唯一、病因と病状と病理所見が確立した「病気」であり、発熱療法という有効な治療法が日本でも実施されていた。そのご宇野は快癒するが、芥川はその快癒を待たず 35 歳で服毒自殺する。「脳病院」はその後“精神病院”に変わり、近代芸術を賑わせた何人かが入院している。辻潤は「オレは天狗だ」と飛翔を試み収監されている。高村智恵子は自殺未遂の末、総合失調症で収監され収監先で亡くなった。太宰治はバビナル中毒で監禁され「HUMAN LOST」を書いた。中原中也は息子の死から精神不安定になり 30 歳で亡くなった。

オレたちが若いころ、“狂気”“アウトサイダー”“ダダ”という言葉もにぎわっていた、少し古臭い、大正ロマンの匂いがしたかもしれないけれど、新しいもの古いもの、若者の熱気が渦巻いていた。

「暑い」「夏はこんなに暑かったか」「去年もこの暑さだったか」と驚きながらぐたりとしている。思いだして苦笑するが半年前には同じセリフ「冬はこんなに寒いのか」「去年もこの寒さだったか」とぼやきながら何もてにつかず震えていた。暑さ寒さ、1週間も過ぎれば身体が慣れ「なんだたいしたことはない」とつぶやくようになると今はその1週間をこころ待ちしている。暑さがやってくる前の何日間かシャツも着込み「暑くないねこれなら夏は乗り切れる」とかん違いをしていた、まだ夏はきていなかった、「身体が暑さを感じなくなったか」とも思っていたがその1.2日後から極暑がやってきた。2階のアトリエ生暖かい風がよどんでいる、扇風機も換気扇も回しているが、窓から入ってくる風も室内の空気も同じような暖かさ、シャツを着ないで立っているだけで汗が流れる。温暖化現象、エルニーニョ現象、異常気象とメディアがいつている、数字を示されても暑い寒い、暖かい涼しいといった感覚はピンとこない、その日の気分によるのか、オレが鈍いのか、ただ「今は暑い」とだけは見える。

昔北海道に行ったとき「大阪は暑いですよ 部屋の中 立っているだけで汗がかってに流れる」というと向こうで牛の世話をしているおじさんが「へえ そんなに暑いか」と驚いていた。もっとも天気図を見ていると最近の東北も北海道も気温は高い、関東などは関西よりも高温の日がある、けったいな現象がでてきている。話が大きくなりすぎたのでまた戻って、自分のこと。「世間話も お前の下らん事情も 聞きたくねえよ」とおっしゃいますが、「膝の話 膝は大事ですぞ まだまだ山 登れる下れる 実はねえ 前にも言ったと思うが タイツを常用しているんです 真夏の今もはいている こいつを着用していると 膝も腰も痛くならない 下痢にもならない」個人的なものだからだれかれに薦めるわけにはいかないが、「だまされたと思って 試されては やはりだまされた と思ったらおやめになったら」というような軽い調子で試してください。

毎日の安威川、この暑い季節は夕方5時過ぎ6時過ぎに土手に到着、上流に向かって走り始める。歳相応なのか遅すぎるのかスピードを出して走れない、「歩くのと変わらないじゃないか」と罵られそうな速さで走る、無論みんなに抜かれる、時にはもっと遅いやつがいないでもない。年配の女性は遅い、若い兄ちゃんて飛ぶように身体を持ち上げながらも遅いやつがいる、これは遅く走る鍛錬か、持久の訓練か、とにかくオレの遅いのはわけが違う。山の登山道が大雨のあと変わるように安威川の流れが少しずつ変わっている。「あそこの中洲がなくなった あそこはもっと段差があったのに 今はほとんどフラットに近い 大雨から相当日数が経っているのに いまだに水量が多い」などと水を見ながら走っている。暗くなるとサギがよく鳴く、例の汚い声でかい声で「ギャー」と吠え立て、本人はすました顔でふらり飛んでいく。夜釣りのヒトが何人かいる、竿に電球をつけコンクリートブロックにこしかけ魚がかかるのを待っている。若い兄ちゃんもいるのにはびっくりだ。

安威川もあと何年かすればこのあたりより2.3キロ上流にダムができるらしい。「中止」と決まっていたがその後も周辺工事は着々と進みあとはダム本体の石ころを積み上げる工事だけなのか、「中止を中止する」とも聞いたこともないが、着工の号令を待っているというのが本当らしい、大型土木工事、国家百年の計、こいつは簡単に止まらない、ひとたび決まればなにが何でも進んでいくということなのかもしれない。

今日は空模様がおかしい、少し冷たい風を感じる、生暖かい風の中に時々暑くない風が感じると思いつついつものように河原に降り立った。「うん 多少涼しい ありがたい」と走り出した、進行方向、右斜め前方が暗い、「遠い方角は雨が降っているのか」と思わせる黒い雲、稲妻が光りだした、あちらにこちらにと閃光が走る、稲妻の閃光は直線ではない、上から下に落ちるときでも、オレが鉛筆で線を引くように、絵のような線が残る、横に走る場合はもっとにぎやかな線になる、おなじ線が2度走るときは前の線と2度目の線がほとんど同じ軌跡を描く、稲妻の閃光はオレのデッサンの線だ、一瞬の華だ、ただ音はなかなか聞こえてこない、むかしは「音の速さは00/秒 だから 今の稲光は おおよそ00キロ先だ」なんて即座に計算していたが、全く忘れてしまっている、なかなか音が、ごろごろが聞こえてこないのでまあ安心と走り続けた。帰り道は空がきれい、積乱雲がまっ白に、まっ黄色に、セルリアンブルーの空、所々に黒い雲、車のヘッドライトがきらきら、「わわ きれいな」と振り返ったら、後ろは燃えている、オレンジ色、黄色、赤色、後ろ向きの全部がまっかっか、その中を稲妻の閃光がキラリ。

近藤裕<脳病院をめぐる人々>より

狂った智恵子は口をきかない
ただ尾長や千鳥と相図する
防風林の丘つづき
いちめんの松の花粉は黄いろく流れ
五月晴れの風に九十九里の浜はけむる
智恵子の浴衣が松にかくれ又あらわれ
白い砂には松露がある <松露-ショウローきのご類>
わたしは松露をひろひながら
ゆっくり智恵子のあとをおふ
尾長や千鳥が智恵子の友だち
もう人間であることをやめた智恵子に
恐ろしくきれいな朝の天空は絶好の遊歩場
智恵子は飛ぶ

今の若い人が高村光太郎・知恵子夫妻の名前を知っているのかどうかは知らないが、オレたちが十代のころは国民的詩人だったような気がする。「東京には空がない・・・」というフレーズは誰もが知っていたように思う。光太郎はロダンを真似た彫刻、自分の手を木で掘った彫刻が美術の教科書に載っていた、彼の父の光雲は猿の彫刻家として有名だった。新宿中村屋に集う人たち、萩原碌山や中村彝等よりも有名だった。光太郎の彫刻はどこがいいのかわからないけれど、妻知恵子のことを綴った知恵子抄は好きだったが、20年30年発狂した妻を抱え看病しあの透明な詩を造ったことなどは今はじめて知った。晩年精神病院に入院した知恵子は、死にいたるまで病室からほとんどでることがなかった。「回診時、コツコツと扉をノックする、静かに開ける。それから間をおいて、お元気ですかと問いかける。すると知恵子さんは微笑をかえされる。これがわたし達と彼女の交渉であり、感情交換、診察でした」（斉藤徳次郎-智恵子さんの思い出-茂吉？）つまり根本的な治療は行われなかった、治療法が当時はなかった。知恵子の異変に気づいた光太郎が、自己流の温泉治療、発熱療法などせず、斉藤を頼ったとしても、施す治療法はなかったのである。

知恵子抄：高村光太郎の妻：長沼智恵子との出会い、同棲、発狂、療養、死にいたる27年間がつづられている。知恵子抄に昇華された世界は、悲劇的日常のごく一部。精神分裂病（精神分裂病は近年、人間そのものが崩壊するような病名が問題視され、現在では総合失調症と呼ばれる）は知性が崩壊し躁暴性をはらむこともまれではない。光太郎の当時の書簡などには、その酸鼻な地獄絵を描いて余りある。狂気を抱かえると言う現実自身はもちろんのこと、周囲の人間たちにとっても激しく動揺させられる事態であった。

光太郎書簡より：連日連夜の凶暴状態に徹夜つづき、さすがの小生もいささか困却いたしております。何とか方法を講ずるほかないよう存じます。これを書いているうちにも知恵子は治療の床の中ででたらめの寧語（丁寧語）を絶叫している始末でございます。看護婦を一切寄せ付けないことと一切小生が手当ていたしおりほとんど寸暇もなき有様です。

太宰治も入院させられている：井伏や妻にだまされ入院させられた。小便くさい留置所みたいな部屋に投げ込まれた悔しさに、太宰は自死をくわだてるが帯や紐類を取り上げられる。何とか高窓と首に布を巻いてぶら下がろうとするが看守にぶん殴られた。バビナールという薬中毒だった。

狂気、発狂、きちがい、これらの言葉が死語なのか使用禁止語かは知らないが、いつの日か彼等と話してみたい。

「食う」「食っていく」今の日本、食うということで贅沢さえいなければ腹は満ちる、飢えることも偏ることもない。スーパーマーケットに行けば所せましとたくさんの食材がいく種類も売っている、しかも安価だ。それを買って調理すれば毎日欠かさず旨いものが食える。「50年前の日本人は飢えていた」と講演していたヒトがいた、思い当たることがたくさんある、オレたちは幼少・青年のころ「もっと食いたい」という欲望があったが今の若者たちは「もっと食いたい」という希望はあるかもしれないが欲望はないだろう。

Never Cry Wolf BY Farley Mowat ファーリー・モウエット著<狼が語る><カナダの国民作家が北極圏で狼の家族と過ごした体験を綴ったベストセラー>冬のある日、カナダ野生生物保護局から連絡が来た。「オオカミがカリブーを全部殺している、狼の大群によるカリブーの大虐殺からカリブーを保護するためにその実態を調査しろ」(カリブーとは北アメリカの家畜化されていないトナカイ)この内容がフィクションなのかノンフィクションわかりにくい本だった。彼は大自然の真ん中にひとりでいた、イヌイットの何人か、橇用のハスキー犬、そんな大自然の中で何日か経ったところにオオカミの家族とであってその近くに彼も陣取った。オオカミの家族、その近所にキツネの家族、オオカミの食糧貯蔵庫をキツネがこっそり利用している、抜き取っているキツネの巣穴を掘り返し彼らを粉砕してしまうことなど容易なことなのにそんなことはしない。キツネもオオカミを恐れているようには見えない、オオカミから数メートルのところを何の反応も起こさず横切っていく。カリブーは北極圏で目にする唯一の大型草食動物でむかしは平原のバッファローと同じぐらい無数にいたが壊滅的に数を減らしている。政府関係者が猟師・罟猟師・交易商人から得た証拠はカリブーの絶滅は主にオオカミによる破壊行為が原因であるという。オオカミ・カリブーの関係の調査研究によってオオカミの撲滅を展開するに足る口実を得たい、ということで雇われた。ところが今現在ここにはカリブーはいない、まだカリブーがやってきていないのだ、それでもオオカミ家族は生きている。どういうことかしばらくはわからなかったが、なんと野ネズミを食っている。オオカミに関する身体能力と見あう獲物、オオカミがネズミを食べるばかりか、実際にそれを常食にし、こどもを育てているという思いつきは、神秘的なオオカミの性格にはあまりにも不似合い、だったが、オオカミは食糧倉庫をネズミでいっぱいにしていた。ここで筆者はテケレツな実験をする、自身がネズミを食って体力が維持できるかという実験。最初はネズミを解体して煮て食っていたが物足りないこれではオオカミも物足りないはずだろうと思ったが、皮以外を全部食ってみると全ての栄養で身体がみなぎったとかかかっている。実験でネズミを食う、何日間もそれだけを食う、シチューにしろクリーム煮にしろオレにはちょっと、さすがにすごいヒトが世界にはいるものだ。とにかくオオカミは大型のカリブーにはなかなかありつけない、カリブーを殺しているのはヒトがほとんど、食っているのもヒトがほとんどということらしい。「野生のオオカミ」「大草原のハンター」なんて題名の動画の画像で大型の動物を追いつめているオオカミ、ところが日常はなかなかこんな風に格好いいのではないようだ。この本ではキツネやタヌキと同じような小型生物を食っている、それともこの場所だけの特殊事情か、とにかくオオカミ君も日々の食生活、子育て生活を垣間見た。

藤村久和<アイヌ、神々と生きる人々>アイヌの人たちは、北海道、樺太、千島という北の厳しい自然条件のもとで暮らさなければならなかった。動物を殺していると一般に受け取られている“霊送り”アイヌのヒトにとってそれは殺しているのではなくこの世の仮の装いある肉体と霊とを切り離しその霊をあの世に送る。ヒトがクマを獲る度にいいいにその霊を送ることでクマの神様はクマの装いでいつも喜んでヒトの前に姿を現す。神様の霊は肉体をこの世に残していく、その肉体を人間が食料としていただく。肉体は神様の霊が持ってきたお土産なのである。お土産をもらったからお礼をする、供物を奉納する、クマの神様の霊はあの世で他の神様に「ヒトによって祭られた」と伝える今度は別の霊が喜んでやってくる。アイヌのヒトは霊送りを続けるのである。クマ等の動物に限らず、自分たちと関わった全てのものの霊送りをする。クマでも日曜雑記のお椀でも霊送りをする。

食うということ、狩猟民族でない我々、日本人は農業中心に動いてきた、米という穀物を大事にしてきた、社会の構造が農業、稲作を中心に長い間動いてきた。魚を獲るヒト、獣を獲るヒト、米以外の作物を作るヒト。民俗学の本を読んでいると、幾多の職業があって、幾多の労働があって、幾多の神様がいて、それはそれは面白い。

山野井徹著<日本の土>地学・土質学の本なら読みたくないで借りない、というのはオレの周りに何人か土木関係の人がいて、土質の資料をパラリと見ることが何度かあった「これはどうもあまり興味がわからない」読んでもわからないというのが理由。とはいえ土木のこと、街でも山でも見渡し「あれは なに」「あれは どうして 造る」「あんなことが どうして わかるの」と聞きたいこと不思議なことがたくさんある。ただ友人知人に聞いても的確な答えは返ってこない。以前高層ビルの現場にクレーンが乗っている「あのクレーンは どうして上げたのか」聞くと、友人が5.6センチもあるような分厚い本を指して「ここに その方法が 載っているよ」といわれさじを投げた。後日、別の友人から「クレーンにジャッキが付いていて ビルとともに クレーンも上がる」「最後に小さいクレーンを うえに上げ 大きなクレーンを解体 より小さいクレーンを うえに上げ という作業を繰り返し 最後 ビルの上は天井だけになる」と聞いて納得。

“日本の土”という題名、土ということでは、土を水で練った粘土を形にして窯に入れると陶磁器になる。なぜ粘土を熱すると石のように岩のように硬い塊りになるのか、これは不思議なことだけれども知らない。古代人がたまたま土を水で練った形を火山の熱気が吹き出るところにほっておいたら陶磁器ができていた、なんてことも知れないが、この方法を発見したことはすごい。ところでこの本のサブタイトルに<地質学が明かす黒土と縄文文化>とあった。土木関係、地質関係の本と思ったが縄文文化と聞くと興味がわくということで読みだした。本のはじめのほうは土質・地質の難しい話が続いたが、徐々に1万年前の日本人の話になってきた。日本では1万年前から縄文文化が始まった。それ以前は石器時代、3万年以上前は人がいた形跡がないということだったが、だんだん日本にも3万年以前のヒトがいたのではというように変わってきた。縄文遺物は黒い土の中から出る、石器時代の石の遺物は茶色い土の中から出る。この仕組み悪用して素人の“某”が石器時代を捏造したと怒る先生。最近知ったが“某”は考古学の素人、その素人にだまされたなみいる玄人、大組織、考古学ファンのセミプロ、皆さんふがないねえ。その話はさておき、この黒い土はなんだ、「1万年の間に積もり流れ込んだ火山灰やら土砂やらでは説明がつかない」と長い間研究したそうだ。

“クロボク土”という。草原植物が焼けた炭が入っている。中国地方から中部地方まではほとんどない。「焼畑を1万年間続けた跡ではないのか」と考えたが「なぜ 縄文人が焼畑を続けた」ということがわからない、農耕民なら森林を焼く草原を焼くのは世界中で見られる焼き畑農業だが、縄文人は狩猟・採集のヒト、なぜ野焼き、山焼きをしたと答えは出ない。そこで先生、現在でも野焼き山焼きを大規模にやっている奈良の若草山、山口県の秋吉台、阿蘇火山などを訪ね歩いた。訪ね歩いたところはみんな草原だった。石器人も縄文人も同じヒト、1万年2万年と時が経て気候が温暖になった、針葉樹ばかりの中に広葉樹が繁りだした。槍だけを使っていたのが、投げ槍や弓矢を使うようになった、土器を発明し竪穴住居に住むようになった。ではなぜ石器人がしなかったことを縄文人がしだしたのか、1万年間草原を焼いたのか。先生は訪ね歩いた先でワラビやヨモギを知る、草原を焼くと食料として良好な植物が豊富に生育する。ほとんどの縄文土器が煮炊き用深鉢だった、生では食べられない植物を食料にすることが可能になり食糧事情が安定し、人々は定住化するようになった。クロボク土は縄文人が1万年間草原を焼いた結果の文化遺産と結論付けた。地学の先生が縄文人の生活を解明された。「考古学の分野に足を踏み入れてしまった」と謙遜気味である。山草や木の実は今も美食の中にたくさん残っている。それぞれに加工、料理の仕方があるらしいが、たまに食べると上手いものだ。発明された器は水をいれ煮炊きに使われた。さしずめ火を熾してバーベキューばかりの食事に、煮物、漬物、酒が加わり食事風景も旨さも増したというところかな。最後に先生、詩的なことを書いているので紹介。

縄文人は竪穴住居の「イエ」に定住した、「イエ」の外には「ムラ」があり「ハラ」が広がり、外には「ヤマ」「ソラ」という神の世界があった。

食器ができる、家がある、という変化だけで1万年の時間がかかった。1万年という数字は百年でもわからないオレには大きすぎるが、同じ場所で同じことを同じように続け、ヒトの生活が営々と続いてきたことはまちがいない。「オレが、わたしが」と強がりをついたところで、子に時代になり孫の時代になれば、全てが消えてしまう。それが1万年ともなれば、10の00乗と天文学的な数字、個人のマインドなんて吹っ飛んでしまう。

一前宣正著<黄砂への挑戦：雑草で中国黄土高原の緑化を図る>この本の出版は2011年。本の“はじめに”で「黄砂が春になると飛んでくる、今はすっかり見慣れたものとなってしまいました。黄砂の回数や量は年々増加し北京やソウルの暮らしは大打撃を被っています。この被害は深刻です、このまま放置すればやがて日本も同じレベルの被害に巻き込まれるでしょう。先生は仲間や中国の研究者と共同研究で22年間黄砂対策を考えてきた。

新疆ウイグル自治区のタクラマカン砂漠は100万年前から砂漠だったが、チベット自治区、内モンゴル自治区、寧夏回族自治区、陝西省、モンゴル国の砂漠は、生活のためヒトの営みが生態系を破壊し砂漠化した、元々は砂漠ではなかった、植物が地面を覆っていた。広さは日本の総面積の1.5倍、その中にたくさんのヒトが暮らしている。2000年間の森林伐採と草原開墾で“段々畑”を造成した結果、丘陵地を覆っていた植物が消え黄土があらわれた。草原の耕地化、ヤギ・ヒツジの過放牧、鉱業原料採掘、自然の供給力以上に増大した人口、生態系の循環を無視した生物生産や土地開発が原因と考えられる。2000年前までは多様な植物、草原があったと考えられている。ここの農作物の収量は低く日本の20%以下しかない。ロバ・ウシを飼っているが、ウシは力が強いが大食い。ウシ・ウマは草を食べるとき地上部を10センチほど残して食べるが、ヤギ・ヒツジは根こそぎ食べてしまうが、大切な家畜だ。

先生たちと中国チームの研究で、2万種を越す雑草のなかからスイッチグラス（バイオアルコールもできる）と sea berry（実からジュースができる）の2品種の雑草が条件にかなって残った。他の雑草は降水量が少なく冬季のマイナス30度には耐えられなかった。青写真ができあがった、村にスイッチグラスと sea berry を植え、家畜を飼い、穀物を植え、生活向上のためにブドウを植えワインを作る、これでうまくいくかもしれない。ところが青写真ができあがった段階で「成功を祈る」という言葉で終わっている、2000年かけて砂漠化した高原が10年や20年で元のようにはなかなかならないということらしい。世界的にも砂漠化を止められた地域は少ないそうだ。中国国内のこういうニュースはなかなか日本には入ってこない。日本では考えられないような気象条件の土地で、緑化がうまくいかいかないかたよりない話だけれど、やはり「成功を祈る」というしかないのだろうね。

ここから先生の雑草の話。人間より昔からあるものだと思っていたが、たった1万年とは驚いた、縄文時代と同じだったとは。200万年前から4回にわたって氷河期が繰り返されたのち氷河期は終わった。針葉樹ばかりで暗い林床にどんぐりなどのブナ林が占有し明るい林床になると、多種類の草木と低木が占有化しその一部が雑草になった。ここで前回の地質学の先生と、植物学の先生の話の食い違いを発見。「石器人も縄文人も狩猟・採集生活という同じスタイルなのになぜ草原を何回も焼いたのか」という話だったが、石器時代には草原は無いと植物学の先生の弁、と話は食い違っている。地球陸地の植生を亜寒帯・温帯・熱帯・砂漠に大きく分けると、地域によって気象・土壌条件が異なるので生える植物種が異なり、雑草の種類も違う。その地域に住む人々の歴史と文化が違うことから、同じ植物でも雑草と考える地域と考えない地域が生まれる。雨の少ない亜寒帯や乾燥地域では雑草は全て有用で、役に立たないという意味に用いられることはない。

こんな話を讀んだあとでいつものように安威川に入って草を見てみた、夏の季節それこそ「くさいきれ」しそうなくらいに背丈を伸ばしている草が中洲にも土手にもいっぱい。背丈よりも高い茎に細長い葉っぱ“ススキ”か“ヨシ”名前は間違っているかもしれないが秋には穂のようなものが現れ、冬にはそれが綿毛になり、そこらあたりに舞い散る。春になるとよきによき葉が生えてくる「食べそうな葉っぱだ」見ているうちに腰ぐらいいまで伸び、黄色い花が中洲いちめに咲く“からし菜”だそうだ。土手には地面から細長い葉がによきり、草食動物が見逃さない草かな。“笹”もたくさん繁っている「おおその向こうには葛だ 炎天下に緑をほしいままにはびこる葛だ」この名も最近知った、「真夏にはびこる蔦で 葉が大きい」と言っただけで「葛だ」と物知り先生、「へえ 蔦は吉野だけかと思っていた」とモノを知らないオレである。丸い葉っぱ、ハートの葉っぱ、かえで調の葉っぱ、てっぺんには無彩色の実か花かがひっそりと付いている。春には河原に白・黄・ピンク・紫・赤と小さい花がたくさん咲く、先日はオレンジ色の“ゆり”がいくつか咲いていた。春のからし菜のレモンイエローの大群は圧巻である、秋にはススキの群生が圧巻、がまの穂のようなモノもある。とにかく固有名詞は知らないが、たくさんの種類の草がぼうぼう、市の造園車が草刈に来る、1週間もすればまたぞろ生えてくる、「いやだねえ草は・・・」とぼやける日本は、自然環境がいいのだ。

月末に槍ヶ岳への登山を計画していた。新穂高温泉P（ここにはわざわざ大きい登山者用無料パークینگが用意されている）→槍平→槍ヶ岳の計画を3日間かけて行こうと思っていたが、長野県の天気予報がずっと雲と傘マーク、特に登る日のあたりは降水確率50%と思わしくない。普段ならもっと直前まで「行こうか やめようか」と逡巡しながら決めかねるのだけれど今回はヒトを連れて行くこともあって早々中止を決定した。槍平までの道が谷川に沿っている、何本か横から流れ込んでくる谷川を横切る、今まで水の少なかった時ばかり歩いていたが、去年登山者がこの谷川で水に流され亡くなっている、雨の続いた日に無理してどこかを渡ろうとして足をとられて2.3人が亡くなったらしいということを知っている、今回は連れて行くこともあってやむなく中止を決定した。<2014年8月：槍平から帰る途中、滝谷出会を横断しようとして、急に増水した水に流され3人が死亡>ふだんはほとんど水がない、水は地下に潜っているのかもしれないが、大きな岩がごろごろするおだやかな谷筋、横に避難小屋がありそこでも1泊したこともある、河原でブランデーを飲み昼寝をした懐かしい思い出がある。そんな河原だけれどひとたび大雨が降ると周りの水を集め増水するそうだ。そんな川を何度か見た「ええい いくぞ 靴を履いたまま」渡ったこともあるが水が膝を超えると無理だ、考えただけでも恐ろしい。

槍ヶ岳は今まで登った山の中で一番回数の多い山かもしれない、40歳代はほとんど上高地から登っていた、それも5月GWといえば高い山の上はまだまだ冬そのもので、雪崩はおさまっているが雪は十分に残っている、そんな中をアイゼンとピッケルでエンヤコラ何度か登った。槍平のほうから登るようになったのは50歳代からかもしれない。かって上高地は中まで乗用車で乗りつけられた、釜トンネルをくぐって大きな無料駐車場に車を止め登山服に着替え奥の方まで歩いた、徳沢、横尾となだらかな道を歩いて進み、蝶が岳から燕岳までとか、槍ヶ岳とかに何度も出かけた。冬の釜トンネル、車は雪で通行不可だけれどヒトは歩けた、先代の釜トンネルは手掘の感じが残る真っ暗闇、壁から浸みだす水がぼたぼた流れ落ちそれが凍結してつるつる路面もでこぼこ、やっとアイゼンをはずし、もうすぐ車までたどり着けると思ったのにまたもや真っ暗の中でアイゼンをつけピッケルを杖に恐る恐る歩いた。釜トンネルの入口に“朴伝の湯”（塚原朴伝？）が在る、山下さんと上高地でテント泊をした帰り「はいってみよう」と売店でお金を払い鍵をもらった。薄暗いところで服を脱ぎあまり美しくはない階段を地下に進むと石造りの湯船、もう忘れてしまったが茶色に濁った熱い湯、名湯かもしれない、ご馳走様。

槍平には小屋がある。冬季は営業していないが横に避難小屋がありそこを一般に開放してくれている。そこも2.3泊お世話になった。冬季の避難小屋というのは、入口が2階の窓辺りの高いところにある、夏に見てもただの倉庫としか見えないが、どンドン雪が積もるとその扉を押し開けて「おじゃまします 使わせてもらいます」と中に入る、それはそれで快適なものです。「去年ここで 仏さんが寝ていた ここはいやなんです」というヒトがいた。毎年来ている常連のヒトのようで、去年の事故当時も来ていたようだ<2007年正月：小屋付近のテント場で就寝中におきた雪崩で4人が埋まって亡くなった>これを聞いたとき「なんで あそこで」と不思議に思った。槍平という地名のとおりおだやかな平地、「どこから 雪が 飛んできたのだろう」と不思議に思った。他のテントや非難小屋にいた30人ぐらいが駆けつけ埋もれたテントを掘り起こし救命活動をしたが4人は意識が戻らなかつたらしい。「他のテント場でも ここは安全 というようなところはない どこからでも なにかの 災難はやってくる」と解説氏の弁。非難小屋、シラフを出しコンロを炊いて食事をし、アルコールをいただくと何度もいいますが快適そのものです 朝までぐっすり眠れます ありがとう」と1000円を箱に入れて帰ります。

新穂高温泉から林道を歩き出してしばらくすると“穴毛谷”という看板があります。その谷は向こうのほう、笠が岳のほうに見えるのですが、どンドン崩落しているようで砂防工事の道路、足場、重機を何度も見ました。「穴毛谷とは 女性性器に似た形の岩がある それを見た昔のヒトが 命名したらしい」まだ若かりし澤山さんとオレと大いに笑って目を凝らしたが、どれがそれかはわからなかった。穴毛谷は地図にも堂々と書いてある。